

古いものから新しいものは
生まれない、新しいものは
古いものを見なければ
新しいものは生まれえない



濱本 美咲

松本 美紀



「LEDが魅せるまち徳島」事業の一環として行われたフェスティバルで



新たな表現を求めて

横断領域表現とは聞き慣れない言葉ですが、デジタルやアナログ、また既成の表現手段にとらわれずそれらを駆使して、その中から新たな表現方法を見いだそうとする研究です。昔から音楽や美術・文芸といった芸術分野ではジャンルを超えた、コラボレーションやジョイントによる新しい表現が追求されてきました。それらはデジタル時代に入って表現方法が広がりさらに加速されてきたと言ってもよいでしょう。そしてすでに数多くの試みがなされており、新たなものを作り上げていくということとは簡単ではありません。

濱本さんは文章を書いたり絵を描くのが好きで、小説と漫画を組み合わせた新しい読み物に。松本さんは携帯メールにアニメを用いた、新たなコミュニケーション・ツールに挑戦しています。他の学生もそれぞれが自分のめざすものを模索しながら、デザインやイラスト、現代芸術、映像作品などに取り組みながら、新たな表現を探っています。

実はこの研究室が開設されたのは2年前、つまり濱本さんと松本さんは最初のゼミ生です。先生の河原崎准教授は他の大学です。に、映画やアニメの世界で活躍する
いうフレーズを入れることにより、ページをめくる瞬間に流れる時間を感じてほしいという意図を込めました。

濱本さんは漫画の台詞がだんだん増えて、後半は小説になっていくという作品に挑戦しました。最初から文字ばかりでは取っつきにくいという人も中にはいるため、そういう人たちが文学の世界にゆるやかに引き込んでいくという新たな表現手段になるかもしれません。

松本さんは、宮崎駿監督の名作アニメ『風の谷のナウシカ』について、感動した場面や原作との相違点について熱く語り、また戦闘美少女ものの作品を例に挙げ、アニメと漫画における「性」の提示の仕方について論じています。

昨年、濱本さんたちはこの冊子や研究室のメンバーの個人誌を持って、東京の『文学フリマ』に参加。全て完売したそうです。

研究室では今年6月に、60周年記念事業のひとつとして、ガレリア新館で行われるマルチメディアアコース持ち回りの展示会に参加。取材にお邪魔したときにはこの企画に取り組んでいました。また月1回、外部からの参加もできるオープンゼミを実施。工学部などからも興味を持って来る人がいます。

人材を送り出していますが、徳大では学生たちとともに新たなスタートを切ったばかりです。そのため苦労もあります。

濱本さんは、「先輩がいないので全てみんなの手探りでやっています。コース名も今年から新しくなって後輩も増えてきたので、もっと広い動きをしていきたいです」

松本さんは、地元企業のLEDを使った市民のフェスティバルにも参加した経験があります。「社会とのバランス感覚も養い、卒業してからも役立つものを身につけて社会に貢献していきたいです」

個々の創造力と全員の協力の横断も

個々の研究だけでなく、研究室の全員でアイデアを持ち寄り創作していくことも、表現の領域横断には欠かせないことです。そこでまず全員で作りに上げたのが「はこ」のなかみという冊子です。印刷物では表現が難しいものもありますが、それぞれが工夫を凝らして完成させました。

例えば塚本和義さんの作品は、映像をいわゆるパラパラ漫画のように使い、一コマ一コマのページの間「ダルマさんがころんだ」と

兄貴のような先生とともに

研究室はアットホームな雰囲気です。研究会では好きな映画や個人の作品の発表などを行い、オフには飲み会やパーティなども開かれます。河原崎先生については、「先生ほど真摯に学生と向き合ってくれる先生はいない」と二人が口をそろえるほど、良き兄貴のような、先輩のような存在です。

「表現方法で悩んでいてこのゼミを知りました。先生は親身になって考えてくれ、自分たちのやりたいことを導き出してくれます」と濱本さん。松本さんは、「先生の言葉でいろんな事に挑戦できました。厳しい反面、楽しくてやりがいがありますよ」

河原崎先生は33才。京都造形大学で教え始めて、通算10年となります。「いつまでも学生と同じ目線でいたいと思っています。先生ぼくなりたくないんです」「という先生のアドバイスは、「学生のうちに恥をかけ。みんなまじめなんですけど、もっと外の世界を広く見てほしいですね」

この研究室が私たちに、どのような新しい表現の世界を展開してくれるか、楽しみです。